

の月夜
鴉渡舟人



長
文楽座

四
梅
野

四月の人の形浄瑠璃

— 演出總形人・線味三・夫太 —

(部 の 晝)

姫

山

姥

松浦館の段

義士

銘

夕傳

細作鎌腹の段

妹脊山婦女庭訓

妹脊山の段

★十四日より晝夜の狂言入替上演致します★

(部 の 夜)

一谷嫩軍記

熊谷物語の段

久松染

新版歌祭文

野崎村の段

木村富子作

山村若子振附

小

鍛

治

昭和十九年四月一日初日

(二十五日マデ)

初日 晝十一時・夜四時 二部
毎日 晝十二時・夜五時 開演

● 一部料金 ●

一等席 四圓九十錢

二等席 二圓四十錢

三等席 八 十 錢

(各等入場税共)

一等御座席 五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符専用電話

南 ④ 四七一 一番

一般御用の電話

南 ⑥ 三〇三 二番
三七八 八番

★畫の部（十四日より夜の部）

嫗こもろ 山やま 姥うは

梗 概 松浦館の段



松浦館の段

前 竹本七五三太夫
 鶴澤綱造
 後 竹本繼太夫
 豊澤仙糸
 フ 鶴澤友二郎平
 レ 鶴澤寛子

坂田藏人時行は遊女八重桐に馴染んで勘當され、父の敵平正盛を討うと放浪中煙草賣に身を賣し、大納言兼冬の館で、頼光と婚約ある澤湯姫の病氣慰めの三味線を弾いてゐると、是も時行に別れて流浪中の八重桐が來合せ、廓話に事寄せて時行の薄情を罵り、時行の妹糸萩が小夜の中山で物部平太を討つた事を語ります。時行は身を愧じて自殺し其魂魄が八重桐の胎内に入つて、八重桐が勇力を現はすと云ふ筋です。因に支那思想で云ふ山姥（山姑）とは山中に住む鬼女の類で、丈高く色黒く赤目黄髪、深山の樹木の間鳥の巢の如きものを作つて住み、夜人家を叩いて物を求め、或は老嫗の姿をして猿の如く山谷を飛び、人の子女を盗むなどと支那の書にあります。佛教で山姑と云ふのは輪廻無窮の体の謂です。

人形役割割

澤	湯	姫	桐竹紋太郎
腰元	可門	吉田龜次	
腰元	更科	吉田常次	
煙草屋源七 實は坂田藏人	吉田光造		
傾城	八重桐	桐竹紋十郎	
太田太郎	吉田藤一		
取巻	大ぜい		

山とは世界、姑とは凡夫の意で即ち一切衆生輪廻止む事なく生死に沈淪するを「よし足引の山姥が山廻りす」と偶意したのです。謡曲の「山姫」是等の意を体して作られたもので、此の淨瑠璃の原據となつてゐます。

忠孝一本は我國道義の
精粹にして忠誠の士は
又必ず純情の孝子なり

戰陣訓



彌作鎌腹の段

切竹本大隅太夫

鶴澤清八

人形役割

百姓 彌作 桐竹龜松

女房 おかや 吉田小兵吉

萱野 和助 桐竹紋司

代官 七太夫 吉田玉徳

狸の角兵衛 吉田兵次

仲 間 吉田萬次郎

義士銘々傳

彌作鎌腹の段

この「彌作鎌腹」は寛政三年九月大阪角座上演奈河七五三助作の「いろは假名四十七訓」の六つ目にあたり歌舞伎から淨瑠璃に轉じたものであります。赤穂義士の一人萱野和助に絡る一哀話であります。

梗概

赤穂浪士の一人萱野和助の兄彌作は、強慾の代官七太夫と約して、弟和助を印南と云ふ豪家の養子にしようとしたが、弟は失望のある身だと承知しなかつた。彌作は詮方思案に暮れ果てた。折柄七太夫が入り來つて約束なればと和助を連れて行かうと云ふ彌作は事をわけて約束を破談しようと種々辯疎したが、七太夫は印南家より百兩の周旋料を取つて居るので承引せず、果ては武士が立たぬ切腹せんなどと無理を言ひ掛ける。彌作は元來正直者、弟に他言はせぬと誓ひ乍らも、せめて之を言ひ立てれば七太夫も聽き容れて呉れようと淺果にも故主の仇吉良を討たんとする赤穂浪士四十餘人の其の一人に弟も加はつて居るので、養子縁組は無益なりと、つひ弟の大



望を口外してしまつた。だが七太夫は尙更承知せず
 今夕暮六つの鐘までに再度和助を説いて呉れと歸へ
 つて行つた引違に和助が歸へつて來た。彌作は事の
 始終を和助に物語つた。驚いた和助が、一大事知つ
 た七太夫、住家へ驅け込み只一打ちとあせるのを引
 留め、大事は明しはしなかつた。たゞお前の志を確
 め様と一寸言つてみたゞけたと言ひ紛らかした。折
 柄暮六つの鐘弟は暇乞して出發した。程なく又七太
 夫襷鉢巻の扮装で出來り、和助を渡せと罵る彌作斷
 りの印にと和助より預つた五兩の金を出す。七太夫
 は怒つて先刻聞き知つた大望を訴人して賞金にあり
 つかうと駈け出した。彌作も、もう此上は絶体絶命
 と鐵砲を取り出して、駈け行く七太夫を只一發に仕
 留め、己れも代官殺した上は生きては居られぬ、切
 腹しようと山刀を抜き放ち腹へ當てたが百姓の悲し
 さ、氣後れがしてどうも刀が腹に立たぬ、百姓に似
 合ひの草刈鎌でと腹へ打ち込み切腹する所へ女房お
 かやも立ち戻り只うるく。弟和助も虫が知らすか
 又とつて返し、此の有様を共に悲歎にくれる。その
 時、一人の虚無僧が入り來つた。笠を脱ぎ捨てると
 みると、それは盟主大星由良之助であつた。由良之
 助の目も濡れてゐました。



脊山の大判事

大判事
久我之助

妹山の定段

定高
難鳥
こし元

人形役

久我之助清鳥

娘元小雛

腰元小雛

後定桔

大判事

吉田玉助	桐田政三	吉田常三	桐田紋十三	吉田榮三	割野津喜左衛門	竹本伊達太夫	豊竹宮達太夫	竹澤伊達太夫	鶴澤寛治郎	竹澤寛治郎	野澤南太夫	野澤吉三郎	竹澤清太夫	鶴澤太夫	野澤太夫	野澤太夫
------	------	------	-------	------	---------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------

妹脊山婦女庭訓

妹脊山の段

古く幸若舞曲の「大職冠」を承け、操淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿大臣のこゝを仕組んだものに正徳元年(二二三七)竹本座上演の大近松作「大職冠」、寛保三年(二四〇三)四月竹本座上演の竹田出雲作「入鹿大臣皇都諍」があり、これに暗示を受けて作られたのがこの「妹脊山婦女庭訓」全五段で、作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南に後見として三好松洛が名を列れ、明和八年(二四三二)正月、竹本座に上演された。結構は雄大、趣向は奇妙、正に王朝物の代表作で、大和方面に古來有名な説話傳説を活用し巧妙複雑な技巧の極致を見せてゐる。殊に全五段の中ではこの三段目切山の段が舞台技巧の頂点を示すものとして名高く、この道行はその第四段目に當り、鑢七上使、姫戻り、金殿へま續いて行く。

元兎のはびこる世にも色は變らず櫻花、咲き亂れ

梗概

た彌生の頃、久我之助は父の勘氣を受けて領内紀伊の脊山に籠居し、法華經を讀誦して心を澄ましてゐる。又雛鳥は清舟を慕ひ、病と稱して領内大和の妹山に養生し、侍女と共に雛祭りをして氣を晴らしてゐる。この兩家の山莊は吉野川を隔て、相對してゐる。

雛鳥の侍女小菊、桔梗等は雛鳥の心を知つて之を慰め、雛鳥の戀文に石を括り附け、對岸まで届けかしと念じて之を投げた。其の文は石と共に川中に落ちたが、瀧つ瀬に轉がり押上げられ突き流されて行く。久我之助は之を眺め、愛人からの戀文とは氣も付かず「石が水に沈まぬも世の逆さま事の習ひか、さるにても父の底意はいかに」と、之を占ふ爲めに柏の葉を川に投げた。之を見た雛鳥は對岸に駈出で「ナウ久我様か懐しや」と聲を掛けた。久我之助も「オウ雛鳥無事で」と互ひに顔を見合せ、橋渡しなき水の流れを恨んで遣る瀬ない戀に胸を焦す。

この時大判事と定高とは入鹿に命ぜられた難題に張裂けんばかりの憂愁を胸に秘めて、それ／＼の山莊に入り來り、思ひ／＼に入鹿の命を語つて愛子の心を試す。然るに久我之助は人臣の道を重んじ、雛鳥は貞婦の道を守つて共に死を決す。是に於て兩家の親は愛子を殺しても、せめては其の愛人を助けたく、互ひに言合せた様に櫻花の枝を川に流して我が子の無事を知らせて安心させる。

然も定高は意を決し、愛人の爲めに喜んで命を捧げる愛子の成佛を祈り、血の涙にくれて雛鳥の首を刎ねる。又、久我之助は采女の所在を父に告げて、刀を腹に突立てる。相愛の兩人の親は無量の感慨に打たれ、直ちに兩家和陸して共に死ぬる各々の愛子の爲めに婚姻を結ぶ事となり、定高から雛鳥の嫁入として、其の首と共に雛道具や調度も吉野川に浮べて贈り來る。大判事は泣いて之を受取り、久我之助に雛鳥の首と未來の契りを結びせて介錯し、やがて入鹿誅伐の當麻の義軍に投ずる。

★夜の部（十四日より晝の部）

一の谷 嫩軍記

熊谷物語の段
首實檢の段



熊谷物語の段

前 竹本住太夫

鶴澤重造

首實檢の段

後

竹野豊鶴
本澤吉相
相生太夫
吉五郎
呂太夫
友衛門

實歷元年十二月一日（二四一一）より豊竹座に上演された。淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豊竹甚六、故人並木宗輔と作者名を並べてゐる。（並木宗輔は實歷元年九月三段目までを作つて歿したと云はれてゐる。）全五段からなり、この段はその第三段目に當つてゐる。

梗概

爰は攝州生田の森なる熊谷次郎直實が陣屋で、木戸の外には、花も盛りの櫻木に近く、一枝を伐らば一指を切るべし、の制札が立つて居る。

落人と成つた平經盛が室藤の局は暫時の隠家を頼みに爰へ来て、圖らずも熊谷が妻相模に會ひ、我子敦盛の敵討に助太刀を頼んだりする。藤の局を兎も

人形役割割

熊谷次郎直實	吉田玉助
妻相模	吉田光造
藤の局	桐竹紋司
堤軍次	桐竹紋昇
源義經	吉田榮三郎
梶原平次景高	吉田多三郎
石屋彌陀六	吉田玉市

角も奥へ忍ばせた相模が、我子小次郎初陣の様子や如何と案じて居る處へ、直實が思案の體で立歸り、相模を見ると不興顔、堅く言置いた詞に背き、女の身で陣中へ來た不届を叱りつける。相模が、小次郎の初陣に心引かれて、つい百里近くの道を來て了つたと詫び、合戦の模様を尋ねるのに、直實は、小次郎の比類無き働きから、また自分が敦盛の首級をあげた功名を語る。それを物陰で聞いた藤の局、我子の敵と不意に切掛けるを熊谷は何奴と引据へたが、藤のお局と聞いて悔り上座に直して畏まる。と云ふのが、平家世盛りの頃、相模は藤のお局に仕へた者、一ト昔の以前、勤番の武士佐竹次郎と馴染め、御所を拔出で東へ下つたが、其の佐竹次郎こそ今の熊谷次郎直實であつた。

改めて熊谷は、須磨の浦曲に是非なく敦盛を討つた次第を物語る。

今は藤の局も、戦場の常と詮方なく諦め、せめては回向の爲と、一間に飾つた我子の鎧の前に、遺品

なる青葉の笛を吹いて手向けると、障子に人影、我子の姿よと駈寄るを相模が止める。

聽て直實は敦盛の首桶抱えて、實檢に供へ様と立つ折柄、源義經が現はれて其首級を實檢し、制札の意を察してよく討つたと褒める。

熊谷が出陣の支度に奥へ入つた跡、前に石屋の彌陀六引立て、詮議に來て居た梶原景高、二心ある義經、熊谷を鎌倉殿へ注進と、呼ばはり乍ら駈出したが、彌陀六が石鑿の手裏劍に打たれて息絶へる。

邪魔になる木葉、拾つて上げましたと、彌陀六が其の儘行過ぎ様とするを、呼止めた義經が、彌平兵衛宗清と看破るので、其の眼力に驚いた彌陀六、平治の亂の折、池殿と云合せて頼朝、義經を助けずば、平家は今に榮えんものと悲憤の涙に暮れる。

出陣の時刻移ると、義經が奥へ聲を掛ければ、直實が甲冑姿で現はれる。義經は一間から鎧櫃を

取出させ、其方が大切に育てる娘に届けて呉れと渡すを、内あらためた彌陀六は、敦盛が入つて居るので悔りする。相模は、我子小次郎が敦盛の身代りに死んだを始めて知つて悲歎する。義經は其の切なる心を察し、敦盛ならぬ小次郎の首級に名残りを惜ませる。

聽て義經が、西國出陣の時至れり、用意如何にと熊谷を勵ますに、直實が甲冑を脱げば墨染の衣、頭も青い今道心の姿で、改めて永の暇を願ふから、義經も無理ならぬ望みを許し、我が父母の回向をも頼む。

直實は驚き悲しむ相模を制して、向ふは西方彌陀の國、黒谷の上人を師と頼み、名も蓮生と改めて一笠一枚の僧とならむ、と心の中を語り、主従、親近、敵味方共に名残を惜んだが、直實は一人別れ、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年は一昔、あゝ夢であつたなア、とほろりとなつた氣を取り直すと黒谷さして別れて行くのでした。

新板歌祭文



之伴女房

高の処橋下

豊作

古鞆太夫

相勤中枝

丁籠久松



娘お光

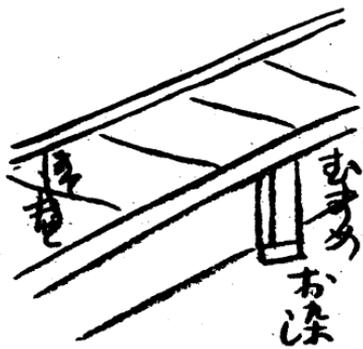


親久作

さお勝



お漆





はな
ま

野
崎
村
の
段

中	竹	本	重	太	夫
豊	澤	廣	助		
如	豊	竹	古	靱	太
鶴	澤	清	六		
ツ	鶴	澤	重	造	

久お松染
新しん版はん
歌うた祭さい文もん

野
崎
村
の
段

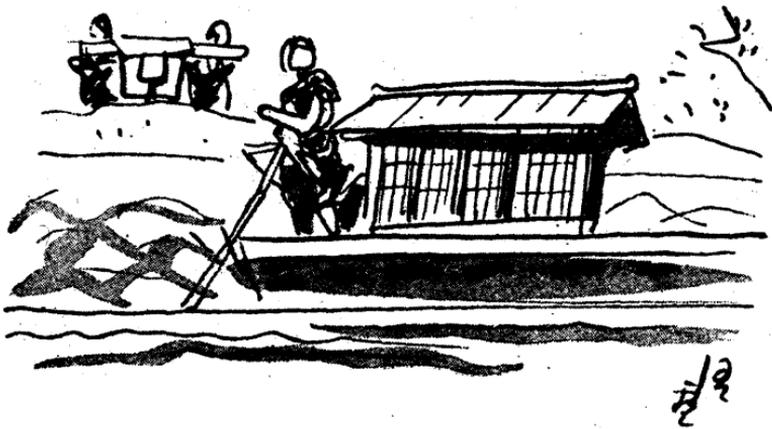
「新版歌祭文」は安永九年九月二十八日初日で大阪竹本座の勾欄に掛けた淨瑠璃で作者は近松半二です。上・中・下の巻に別れ、此度の「野崎」は其中の巻に當つて居ります

梗
概

油屋の下人小助が鳥居前の法印と牒合せ油屋の娘の染に戀慕する山家屋佐四郎から金を捲き上げ、又無頼漢の勘六や鈴木彌忠太と共謀になつて久松が得意先から集めて來た金をすり替る件です。次が「野崎」で下の巻は長町の段と油屋の段に分れ、長町では久松の昔乳母お庄が鈴木彌忠太が山家屋へ入質したらしい寶刀を取り戻す爲、彌忠太に掛合ふが刀は手に入らず、却つて久松から預かつたお染との起請を拾はれます。油屋になつて、山家屋佐四郎はお染を嫁に渡すか、結納金と貸金を返すかと談じ込みます。又、小助は油絞り勘六と共謀になつて、悪企みをしませんが、然う斯うする内、勘六は腕の入墨からお庄の寶子と分り、彌忠太から吉光の寶刀を取り戻すが、その効もなくお染久松は心中するのです。

人形役割割

駕	船頭	母親	下女	娘	久作	親	丁稚	下男	娘
か	竹松	お勝	およし	お染	女房	久作	久松	小助	お光
き									
大	吉田兵次	吉田小兵吉	吉田玉男	桐竹龜松	桐竹紋太郎	吉田榮三	桐竹紋司	吉田玉徳	吉田文五郎
ぜ									
い									



1/2



木村富子 作・山村若子 編
鶴澤道八作曲・大塚克三 装置

小 鍛 冶

能にある「小鍛冶」をもとにしてなつたもので、鶴澤道八が作曲し、山村若子が振附に當つた新作淨瑠璃。刀鍛冶三條小鍛冶宗近が勅命で御劔を打つ事になつたが、勝れた相劔が無い爲め氏神の稻荷明神に祈願をかける事、氏神の稻荷明神の御神體が現はれて宗近を助け、相劔に立つて小狐丸の名劔を鍛へ上げ、勅使鶴澤道成に奉ると云ふ筋である。

(床 本)

	老翁實は	稻荷明神	(豊竹)	竹本	相生	太夫
	小鍛冶宗近	竹本	源太夫	竹本	源太夫	
	勅使 道成	竹本	叶太夫	豊竹	富太夫	
ッ		豊竹	千駒太夫	豊竹	司太夫	
レ	豊竹	松島	太夫			

これは三條の小鍛冶宗近にて候、さても此度大君より御劔を打ち奉れと、かしこき宜旨を蒙りつゝ、かゝる大事をさらんには、我に劣らぬ相劔の者ありてこそ御劔も成就なすべけれ。口惜しくもそれほどの者無しと答へまつらんには、勅諭を背くのおそれ、いかにせむ、此の上はたゞ、神

賊、あなやと見るまに四方より夷が放つ炎の勢ひ、尊をかこみて張じく、いさも危き御有様、其の時、尊は御劔を抜き、直に火焰も立ち退けさあたりの草を薙ぎたまへば、劔の精靈風と成つて敵の方へと吹き返す、猛火は天地に滿ちて、さしも數萬の夷共、朝日に霜と消えてけり、かの草薙の御劔に、劣らぬばかり瑞相を、家に傳ふる宗近よ、とく／＼歸りて壇を飾り、我を待ちなげ其の時に通力にて身を變じ、力を添へんと夕雲の、行方も知らず失せにけり。あら有難や尊やな、これぞひさへに兵神の擁護の功力と宗近が、心勇みて立ち歸る。

宗近裝束改めて、殿げの壇に上りつゝ、幣帛を捧げ禮拜なし。今大君の御詔、御選みにあづかること、これ私の功名ならず、ひさへに兵神稻荷の神、擁護の徳によつてなり、さあらば十萬恒沙の諸佛神、骨髄の丹誠を納受あつて、只今の宗近に力をあはせてたびたまへ、謹上再拜／＼、一心不亂に祈願の折から、虚空はるかに聲あつて、いかに宗近御劔を、打つべき時は只今なるぞ。頼めや頼め唯頼めと、

壇上に現はれ三拜の、膝を屈して直りける。秋ふけて夜寒の衣うつゝにも、露かしぐれかもみち葉の、さかる、色と我が心、打てや／＼と鐵さりのべ、敵への鎧をはつたと打てば、ちやうと相鎧、ちやう／＼、打ちかされたる鎧の音は、天地に響きて夥し。陰陽和合たちごころに、打ち奉る御劔の、表には小鍛冶宗近、裏にはしろく小狐と打つも妙なる神寶。天の叢雲かゝることも、むら／＼雲のみだれ焼き、匂ふばかりの金色は、霜夜の月に照りそひて、いさ深く見えにける。勅命の御劔只今出來仕る。と恭しく捧ぐれば、道成欣然と領承あり。ほう、いしくも打ち奉つたるものよの、天下第一二つの銘。あら心地よや此の御劔、兵神明神になぞらへて、小狐丸と名づくべし。かゝるめでたき藥物を、我が敷島の精神となし、四海を治めたまはんに、高麗もろこしの民草も御稜威のもとにうち靡き、五穀成就や君萬歳と、傳ふる鍛冶の道ひらく。なほ行末を守るべし。これまでなりといひ捨て、又むら雲にとびうつり稻荷の峰にぞ歸りける。

観劇おぼえ帳

昭和十九年四月

日

(晝の部)

第一「姫山姥」に就いて

第二「義士銘々傳」に就いて

第三「妹脊山婦女庭訓」に就いて

(夜の部)

第一「谷嫩軍記」に就いて

第二「新版歌祭文」に就いて

第三「小鍛冶」に就いて

出演者萬一病棄等の節は替役を以つて相勤
め可申儀條々の御座承被下度候

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹 本座 創立(現今ヨリ二百五十九年以前)
貞享元年二月 (道頓堀西ノ芝居)

○文 樂座 發祥(現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎權時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始
メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を 賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一体の人情
溢瀾の日本唯一の公演場でございます

文樂座人形淨瑠璃は 昔に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず我日本に於
ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります、従つて開
演毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に
御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの
点は御客様の御聲として承りたく存じます。

貴重品は 各自にお持ち下さい、お摺席お立ちのときは御携帯を願ひます。

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處で
お願ひ致します。お劇では御遊座下さい。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座みます。

賣店は 一階西側休憩所に御座みます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階、に御婦人は東側の一階と二階に
御座みます。

場内にて 寫眞撮影は絶対にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座みます。

御辨當御持參の御方は何卒御利用下さい。
出演者 病氣其他の事故にて出揃不能の場合は乍勝手代役に相勤めませう
ば右豫め御諒承を願ひます。

松竹株式會社 文樂座
支配人 大橋照夫

電話南(75) 三〇三二
三〇三八
四七一一番

昭和十九年三月廿六日印刷
昭和十九年四月一日發行
大坂市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店・發行者 鳥江 鏡也・印刷所 ミカド印刷合資會社
大坂市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
大坂市東區和泉町一丁目二
一部金二十錢

